



## はじまり

---

もう10年以上前になる。

3月30日、あれは母の誕生日だった。

ケーキを携え、主人と車で実家へ向かった。

母が開口一番、

「お父さんね、金木犀の枝を滅茶苦茶に切っちゃったんだよ。可哀想に、丸坊主だよ。」  
なるほど、この家に引っ越して来たときに植えた金木犀がほとんど葉っぱも残さず、コンパクトになっている。

無理矢理折ったような枝もある。

家と家の密集する北側の隙間に植えたため、この木は未だ満開に花を咲かせることはない。

が、しかし、去年からちらほらと花を咲かせていた。

だが、これは・・・枝を切り詰めたにしては、切りすぎだろう。

「のこぎりとか、はさみでムキになって切ってて。」

と、母。

「なんで、そんなことしたの？」

と問うと、ばつが悪そうに、

「それがいいと思ったんだよ。」

と、父。

今から考えると、そのときから、父の異常な行動が始まっていたのかもしれない。

母の誕生日を祝う最中、父が言った。

「首の所にしこりがあるんだよ。」

首のしこり。

あまりよくない兆候だが、そのときはあまり何かを考えたわけではなかった。

医者に行った方がいいと告げ、実家を後にした。

帰り道、主人が珍しく青信号に気が付かず、後ろの車にクラクションを鳴らされた。

桜が満開の道だったので、見とれていて信号が変わったのに気が付かなかったんだろうと思った。

「いや、誕生日なのに、お母さんにみんなやらせちゃったなあと思って。」

「そうだね。お母さん、かえって疲れたね。」

桜が綺麗な夜だった。

その2ヶ月後、突然母から電話があった。

「お父さんが壊れちゃった。」

困惑しているわけでもなく、涙声でもなく、淡々と父のことを告げる母。

その内容というのは、

父には母に見えない物が見え、聞こえない物が聞こえるという。

「黒い虫がいる。」

父は言う。

「黒い平らな蛇みたいな虫が、畳の隙間に入り込んで、出たり入ったりする。」

30センチの定規を持ってきて、畳の縁をバンバン叩く。

母には見えない。

異常な行為を繰り返す父の姿しか見えない。

「お父さん、壊れちゃった。」

再び母がぼつりと言った。

## 告知

---

『黒い虫』が出現する前に、父は普通っていた医院に行っていた。

「大したことないよ。」

と言われたそうだ。

が、万全を期して、ある大学病院へ紹介状を書いてもらったそうだ。

病院で、一つ検査する。

「来週来てください。」

と言われる。

次の週、行く。

検査の結果も知らせず、治療も何一つ行われず、薬も出ないまま、また一つ検査。

「また来週来てください。」

それが繰り返される。

その間に、父の状態は悪化していった。

母は見るに耐えなかったと言う。

まず躰がすごいと言う。

「普通の躰と違う。雷みたいだよ。すごく苦しそうだし。絶対、喉がおかしいんだよ。」

母が言う。本人も苦しらしい。

「先生にもそう言ってるんだけど。」

一生懸命に症状を話しても、

「う～ん それは耳鼻科の方かなあ？」

としかそのときの医師は言わなかったそうだ。

そんなに検査して、何かわかったのか？

何も知らされないというのは、何もわからないからなのか？

それにしても、治療もなしというのはどうなんだろう？

何もわからないからか？

ある日、父がトイレから怒りながら出てきた。

その訳を問うと、

「黒い虫がいた。」

と言う。

「黒い虫が、『臭いですよ』と言った。」

と、本気で怒っていたそうだ。

このときばかりは、さすがに吹き出したと母は言う。

元々父は、冗談を言って人を笑わすのが好きらしい。正常じゃなくても、そういうユーモアだけは残っていたらしい。それが嬉しくもあり、切なくもあり、早くなんとかしてあげなきゃと母は切実に願ったという。

何回目かの診察の時、父は医師に言った。

「苦しくてしょうがないんです。なんとかありませんか？」

若い医師は父に言ったそうだ。

「そんなことできるわけないでしょう！癌なんだから！」

それが癌の告知だった。

母も父に聞かされて、びっくりしたそうだ。

母にさえ、そんな話はされてなかった。

信じられない。

今、告知はそんな風に直接本人にするものなのか？

父がどんな言い方をしたかわからないが、そういう告知の仕方が許されるものなのか？

それに、癌だとわかっているのに、治療もないとはどういうことなのだ？

母は、こんな病院に通ってたら、父を殺されてしまうと思ったという。

そして、心配してくれたお隣りのご主人のかかりつけの病院に診てもらうことになった。

「これは・・すぐ手術しないと。」

そして、父は癌研で手術することになった。

父の気道は喉にできたできもので、塞がれる寸前だったのだ。

そこにいた全ての医師が、父の喉を覗きに來たそうだ。

こんなに大きくなってしまったのを見たのは、皆が初めてだったそうだ。

「あと2~3日來るのが遅れてたら、気道が完全に塞がれるところでしたよ。どうしてもっと早く連れてこなかったの？」

と、医師に言われ、母は口ごもったそうだ。

「そう言われても。」

あのまま、あの大学病院に通っていたら、父は確実に死んでいただろう。

それも、息が吸えなくなって、苦しんで。

検査検査の間に、手遅れで亡くなった方が、どれくらいいらっしゃるのだろうか。

苦しかったらどうか。痛かったらどうか。恐ろしかったらどうか。

遺されたご家族は、病院を恨むのだろうか。

しょうがないと、あきらめるのだろうか。

癌研に行く4～5日前、父は妙な事を言い出した。

ここ1～2ヶ月言動も行動もおかしかったわけだが、母は特にその言葉にぞっとしたという。

「お母さん、4畳半には行かない方がいいよ。」

寝室に入る襖を開けると、先に横になっていた父が母にそう言ったという。

「どうして？」

母が問うと、

「沢山の人が集まって宴会してるから。」

母は思わず後ろを振り返ったそうだ。

その部屋は、今寝室に来るのに、通って来たばかりだからだ。

というか、今、立ってる所が大勢で宴会をしてるはずの部屋の入り口だった。

4畳半には、誰もいない。

母には何も聞こえない。

一つきりのタンス、祖母の形見の鏡台、取り込まれた洗濯物、私が置いて行った荷物、母が育てているサボテンや花。

電気がついていないから、暗く沈んではいるが、いつもと変わらない4畳半の部屋。

「うんうん、まだやってるよ。」

父は耳をちょっとすましてから、そう言った。

母は怖くなって、慌てて4畳半と寝室の6畳を繋ぐ襖を閉めた。

目には見えないが、本当に大勢で宴会をしているような気がしたという。

それから数日経って、父がまた妙な事を言い出した。

「お母さん。夜寝てると、女の声が『行きましょう』って言うんだよ。」

母は最初、父が何を言っているのかわからなかったという。

「しきりに『行きましょう』って言うんだよ。気持ち悪い。」

嫌そうに父が言う。

それが何を意味するのか、母は突然理解して、

「お父さん！絶対について行っちゃだめだよ！」

と、父に言ったという。

「行かないよ。男の声が聞こえたから、行かなかった。」

大勢が宴会をしてると言い出した日から、それは聞こえ始めたという。

宴会はその日以来、なされた気配はなかった。

だが、頭の上に何人かが立っている気配がしたという。

その気配の方向から、「行きましょうよ。」と父に誘いかける声がするという。

それが、数日続いたある日、男性の声で、

「かのさん、もう行きましょうよ。」

と聞こえてから、もう何も聞こえなくなったという。

「かのさん？かのさんって、おばあちゃん？」

私の母の母、つまり母方の祖母だ。

祖母は何年か前に亡くなっている。

と、いうことは、

・・・おばあちゃんが、お父さんを迎えに来てた・・・？

## 悪性リンパ腫

---

父がお世話になっている癌研有明病院は、以前は池袋にあった。

正式名称『公益財団法人癌研究会 有明病院』

今でこそ、ヘリポートもあるピカピカビルディングだが、当時は普通の古い病院だった。

父は、

・ ・ もう時効だから、書いてもいいよね。

同室の患者さんが、ベッドを仕切るカーテンレールに上着を引っかけておいたところ、上着の重さでレールが曲がってしまったのを目撃したという。

それくらいぼろい、いえ、古い病院だった。

病院へ行くと、父は即入院となった。

気道を塞ぎそうなくらい大きくなったできもの、母はそう言っているが、一般的には腫瘍というのだろうか、を取り除くため、喉を切開した。

## 悪性リンパ腫

ここにきて、やっと父の病が判明した。

「最悪よ。」

父が入院したその夜にかけてきた電話で母は言った。

最初に父の奇行を知らせてきたのと同じように、何の感情もなく。

担当のドクターが、図まで描いて母に説明してくださったそうだ。

両親共々、治療法、病状などを事細かに記録をとっておくような性格じゃなく、

全て「先生にお任せ致します。」状態だったので、

父の悪性リンパ腫が、どの種類なのかとか、何の薬を投与されたのか、とか、正確にはわからずじまい。

勿論、ドクターはちゃんと紙に書いて、両親に説明してくださってます。

その紙も今ではもう失われて久しく。

そこで、インターネットや本で勉強したことを、小出しに記そうと思う。まず、

### 1. 『悪性リンパ腫』とはなんぞや

インターネットでは『血液の癌で、リンパ系組織から発生する腫瘍』とある。

『みんなに役立つ 悪性リンパ腫の基礎と臨床 押味和夫（敬称略）著 第三刷』の序章によると

『悪性リンパ腫はリンパ節などのリンパ組織からだけ発生するとは限らず、リンパ球は体の至る所に存在するため、リンパ節以外にも、あらゆる臓器から発生する。』とある。



皮膚から、鼻腔から、胃から、C方肝炎ウィルスから等々、リンパ腫は発生し、個々の臨床経過、治療反応性、もちろん治療法、そして予後が大きく異なる。

大きく、ホジキンリンパ腫と非ホジキンリンパ腫に分かれ、日本では非ホジキンリンパ腫の方が多い。

インターネットの情報によると、ホジキンは日本では10%、とある。

父の場合、私が目にしたドクター著の紙により、『CHOP』療法を採用していることから、非ホジキンリンパ腫であると推定される。

頸部から発生していることにより、T細胞型と推定される。

あくまで、私の考えです。

最初、癌だと言われ、まだ悪性リンパ腫とはわからなかったとき、てっきり脳に腫瘍ができて、奇行に走ったのだと思った。

後に調べたところ、悪性リンパ腫では、脳に異常が無くても、周囲が異常に思う行動をとることがあるらしい。

そして、本人は覚えてなかったりするらしい。

リンパは体中まわっているのだから、脳にも障害を起こすこともあるだろうと想像できるが、正常なときと、異常なときがあるのは何故だろう？

父も常に幻覚が見えていたわけではなく、正常なときの方が多かったそう。

そして、『黒い虫』という幻覚が見えていた事は覚えているのだが、所々覚えてないこともあるという。

癌研までお隣りの奥さんもついて来てくださったのだが、行きの車の中で父は、あれは何、これは何と建物などの説明をしていたらしい。

だが、「全然覚えてない」と言う。

気が付いたら、ベッドの上だったそう。

## 泣いちゃいけない

---

父が入院してすぐに主人と行った。

父は今どんな気持ちでいるだろうと思うと、泣かないで過ごす自信はなかった。

それでも、私が泣いてはいけないとも思っていた。

母も主人も、父が悪性リンパ腫とわかってから、とても気丈に過ごしていた。10しっかりするところを、20しっかりしていた。

私は反対に父と一緒に弱くなってしまっていた。

父の気持ちを考えると泣けてきて、泣いては主人を困らせていた。

父の家系で癌の人はいなかった。それなのに、父が癌を患ったことが、信じられない気持ちでいっぱいだった。

どうしてだろう？という思いで本当にいっぱいだった。

後でわかったのだが、ほとんど同時期に、父の兄、つまり伯父が前立腺癌を患っていたのだったが。

ここで、

### 2.悪性リンパ腫の発生機序とはなんぞや

簡単に言うと、悪性リンパ腫にはどんな原因でなるの？ということです。

原因は多種多様であり、遺伝子異常、ウィルス、この頃ではピロリ菌との関連もわかってきています。

### 原因その1遺伝子異常、が何故起こるか

遺伝子というのは、その機能なり特徴なり事細かなことを書いてある原本なわけですが、頭からしっぽまでびっちり大事なことが書いてあるかということ、そうじゃなく、所々、「ここって、悪戯書きじゃね？」みたいな何の意味も無い事も書いてあるらしいです（私の知識が古くなければですが）。勿論、そこも実は大事なことが書いてあって、まだ解読できてないだけなのかもしれません。

肝心な事が書かれている部分が、放射線、薬品等々で損傷してしまって読めなくなっちゃったとか、

動植物を形作っている一つ一つの細胞は遺伝子を元にして、全く同じ自分をコピーして作ります。

遺伝子も全く同じ自分をコピーしているわけです。

そのときに、「あれ？うつしまちがえちゃった？」とか、分裂するときに「あっ！余計なものまで持って来ちゃった！」とか、「あれ？頭と胴体が違ってる？」とか、「途中がなんか変。」

とか、

うつす側がおかしくなってしまう、「あ」と書いてあることを「か」って書いてあるのね、と勝手に解釈するようになってしまったとか、それが修復不可能なときに、遺伝子異常が起こってきます。修復不可能な場合、ずーずーとそのままコピーし続けるからです。肝心な事が書かれている所に、上記の事が起こった場合、体内の組織、機能に何かしらの異常が起こってくるわけです。

父は、当時はもう退職していたが、長い間、自家用運転手の仕事をしていた。仕事はできるが、ワンマンでわがままなお偉いさんを乗せていた。朝6時には出かけていき、帰りも帰ってくるのは、夜の8時とか9時だったろうか。勿論、夜中の時もある。土日はお偉いさんがゴルフだとかで、朝4時とか5時とかに出る。つい最近、父は主人の仕事が大変なことにふれ、「俺の仕事は、Tちゃん（主人）みたいにくつくはなかったけど、52日休みが無かったことがあるよ。それでも、本当に嫌になったもの。」と、言った。それは、誰だって嫌になるだろう。

父は6人兄弟の4番目で、体が弱かったせいでとても甘やかされて育った。母も何かと文句は言うものの、父には相当甘い。なので、現役中は、相当ストレスがたまっていたことは容易に想像できる。そのせいもあり、祖母の体質を受け継いだこともあるのか、気管支喘息を発症。発作で眠れないことも数限りなくあり、ひどい発作を起こして治まらず、救急車で病院まで運ばれたこともある。今でこそ、オノンのみの服用で、全く出てこないが、リンパ腫で退院するまで喘息で苦しんだ。

「お父さんのリンパ腫は、喘息のせいっていうのもあるのかなあ？」  
薬、炎症、ウィルス、刺激、ストレス色々な事が頭の中に浮かんだ。  
「そうだねえ。のどのところにできたしねえ。」

母が答える。  
原因は今でもよくわからない。  
一つだけの原因ではないのだろう。色々な事が重なって、発症した父の悪性リンパ腫。

「父ちゃんの前で泣いちゃだめだよ。泣きたいのは、泣いていいのは、父ちゃんだけだ。」  
入院した父の所へ行く前に、主人が私に言った。  
心に染みた言葉だった。

## 父の涙

---

父の病室は6人部屋だった。

病室に入ると、ドアのすぐ横に父はいて、ベッドの上に座っていた。

喉を切開して器具を入れていたので、しばらくは喋れないということだった。

いつも冗談を言う父ではない。顔色も悪く、どこかぼんやりした様子だった。

それでも、主人と私の顔を見ると嬉しそうだった。

後から聞いたことだが、このときもあまり意識が定かではなかったという。

母に促されてベッドに横になる父。紙に書いて、色々話そうとする。

母が今まであったことを私たちに話しているとき、父の目から涙が流れてきた。

私はそれを見た途端、こらえきれなくなって、何気ないふりをして、父の涙には気が付かなかったふりをして、カーテンの裏に隠れた。

そこには小さな洗面台があって、その上の壁には鏡があった。

鏡の中には、泣き顔の私。

「泣いちゃだめだよ。」

頭の中で、主人の声が言う。

わかってるよ わかってるけど。

涙をぬぐって鏡を見る。そして素知らぬ顔をしてまた元の位置に戻った。

これをつい最近、父に聞いたことだが、

「あのときもあまりよく覚えてなかったんだけど、みはが怖い顔して病室に入って来たのは覚えている。」

・・・だってさ、泣いちゃだめだって、Tちゃんに言われてたんだもん。

父と母は顔を見合わせ、

「やっぱりそうか。」

と言った。

「泣いていいのは、父ちゃんだけだって、Tちゃんが言うんだもん。」

父は真顔で、

「そうか。」

と言った。

父は、昔の人だから、滅多に人前では泣かない。

だが、私が一浪して大学に受かったとき、

両親に相談せず離婚して、泣きながら事後報告したとき、父は一緒に泣いていた。

自分の事では、泣かない父が私の事では泣いていた。

その父が、自分の事で涙を流している。

泣いちゃだめだと言われてる。

私が泣くと父も余計悲しくなるだろう。

泣いちゃいけない。でも、涙をこらえるのは、つらい。

父は喘息があるため、喉によく痰が絡むのだが、器具を入れていると、それを上手く排出できないらしい。

たびたび看護師さんに来ていただいて、痰をとってもらっていた。

癌研の看護師さんは綺麗な女性が多かった。

どの看護師さんもととても優しく、笑顔で、何度も呼ばれても、嫌な顔一つせず父に接してくれていた。

私服になれば、今風の綺麗なおねーさん達なんだろうなあと、看護師さん達を見ながらいつも思っていた。

ここで、

### 3. 『気管支喘息』とはなんぞや

『医学大事典』によると、『各種の刺激に対する気道の過敏性が亢進しており、かつ呼気時に気道の閉塞があり、その重症度が自然に、あるいは治療によって可逆的に変化する疾患と考えられている(一部抜粋)。』とあります。

つまり、アレルギーを起こす原因物質、例えば車の排ガスや工場の排煙、動物の毛やハウスダスト等々の刺激によって、気管支の内側が炎症を起こし、浮腫んで気道を狭くします。それが繰り返され、長く続くと、気道が敏感になり、ちょっとした刺激でも反応してしまうようになります。気管支を囲む筋肉、気管支が収縮し、内層の浮腫み・粘膜のヒダ状の隆起がみられ、気道分泌亢進により、痰が出るようになります。これらにより、気道が狭くなったり、塞がったりし、発作時には、喘鳴（ひゅーひゅー ぜいぜいという呼吸）を認め、ひどくなると呼吸が苦しくて横になっていられない状態になります。

発作が起きると、父はよくこの状態でいました。

もっとひどくなると、死に至ることもあります。

父が発作で救急車で運ばれたとき、

「もっと早く呼んでくれなきゃだめですよ！死んじゃったらどうするんですか！」

と怒られたそうです。

実家は寝室が二階にあり、階段が狭かったため担架が入らず、救命士さんに背負われて救急車に乗り込んだそうです。

原因はアレルギー物質だけでなく、ストレス、煙草、過労、寒さ、風邪、ウィルスなど多種多様です。

ちなみに、父は現役当時は、煙草をかなり吸っていたようです。

喘息を患っても、酒・煙草は止めませんでした。

仕事柄、常に排ガスにさらされ、大きなストレス。祖母からの体質の遺伝。

喘息になるのは、当然の宿命だったのではないのでしょうか。

## 覚悟しておいた方がいいよ

---

父は眠りが浅い。物音ですぐ目を覚ます。

6人部屋の一番入り口に近い場所では、あまりよく眠れなかったようだ。

痰をとってもらうので、しょっちゅう看護師さんが出入りするので、同室の方に気も遣っていたようだ。

治療が始まって、すぐ高熱を出し、中断を余儀なくされる。

あまり芳しくないということで、父は個室に移ることになった。

行く度に、痩せて、髪が無くなっていく父がベッドに横になっていた。

あれから父は私達の前では泣くことはなかったが、目が虚ろで、常にぼんやりした感じだった。

母や私がいっても、表情をかえることなく、天井を見たままだった。

ベッドの横には、点滴。血の混じったチューブ。

おしっこが出なくなったと言って、導尿のチューブが出ていた。

便が出なくなったと、看護師さんに摘便していただいたと聞かされた。

トイレまで歩いて行くことができなくなって、ベッドの脇にポータブルのトイレが置いてあった。

熱が39℃から下がらないと聞かされた。

次のクールはもう少し先に延ばすと聞かされた。

熱が下がらないと、治療ができないと効かされた。

熱がこのまま下がらなかつたら危ないと、聞かされた。

聞かされる度、目にする度、悲しくなった。

いつ父が逝ってしまってもおかしくないと思った。

父がおかしくなったと聞いたときから、覚悟はしていた。

「お母さん、覚悟しておいた方がいいよ。」

自分に言い聞かせるように、母に言った。

「そうだね。」

母も頷いた。

「人はいつか死ぬんだから。」

母は考えるようにそう付け加えた。

自分の血の繋がった人が一人ずついなくなる。

この世界、この人間界の中では大した事ではないのだろう。

たとえ、私がいなくなったとしても、この世界は存続していくのだ。それが当たり前なのだ。当たり前なのだが、人間一人の心なんて、そんな大規模じゃない。例えば、大きな事故でたった一人が亡くなったとする。あの事故で死者が一人だけだったのは奇跡だ、などと報道され、関係の無いところでそれを見ていれば、ああ、確かにと思うだろう。

だが、その亡くなった一人の家族や身内に見れば、重大な悲しみなのだ。人間の心はそういうものだと思う。

ここで、父の治療法であった

#### 4.CHOP療法とはなんぞや

非ホジキンリンパ腫のうちB細胞性悪性リンパ腫に用いられる療法。

最初、T細胞種と書いてしまいましたが、B細胞リンパ腫でした。

すみません、訂正致します。

C=シクロホスファミド（商品名エンドキサン）、H=ドキシソルビシン（商品名アドリアシン）、O=ビンクリスチン（商品名オンコビン）、P=プレドニゾロン。

通常1クール3週間で、6～8クール実施します。

リツキサンの薬と併用します。

副作用として、骨髄抑制、つまり血液を作るのを抑えてしまい、特に白血球が少なくなります。なので、免疫力が低下することは言うまでも無く。あとは、吐き気、脱毛などなど。

薬を投与した後は、同室の方々（父の6人部屋は全員が悪性リンパ腫でした。）は、沢山水を飲むように担当のドクターに言われたそうで、ことあるごとに水を飲んで、トイレに通っていたそうです。

が、父は言われなかったそうで、何でかよくわからず、水もあまり飲まないでいたら、かなり後まで手足にしびれが出ていたそうです。

本人は「言われなかった」と言っていますが、言われてたと思います。あの『ほとんど何も覚えてない』状態だったら、言われたことも覚えてなかったに違いありません。

父に出ていた副作用は、便秘、排尿困難、発熱は全て薬の副作用だったと思います。

ただ、父は

「気持ち悪いっていうのはなかったよ。」

と言っていました。

が、長いこと、副作用に苦しんだことは言うまでもありません。



## お母さん

---

父が入院して、一人で家にいる母に携帯を持ってもらうことにした。

「この歳になって、ハイテクの機械を持たされるとは。」

そう呟きながら、携帯に悪戦苦闘の母。

いや、お母さん。

貴女にまで倒れられてしまっては、一人娘は泣くに泣けないです。

防犯も心配だからと、窓という窓に簡易の第二の鍵を買って取り付ける。

これで、少しは安心だろう。

母はほとんど毎日、病院に通って、できるだけ父の傍にいるようにしていた。

父が寂しがるからだ。

気丈に振る舞ってはいたが、母もかなり神経と体が疲れていたのだろう。急に下血したと知らせてきた。

行きつけの医院に行って検査を受けてきたという。

すぐに主人と母の所へ行った。

わりと元気そうな母。

「お母さん、ずっと腰が痛かったのよ。でも、下血したときにころんと石みたいなものが出て、それから全然痛くなくなっさ。」

・・・それは、どういうことだろう？

母は結石だったのか？

結局、検査の結果、母は何の異常も無いことがわかった。

父のお見舞いに、もう一人の母、主人の母が来てくれた。

朝早く新幹線に乗って、わざわざ来てくれたのだ。

うちの最寄りの駅で、山形フェアをやっていたとサクランボを買ってきてくれた。私が好きだからと。

すごく嬉しかった。いつそれを言ったのか、本人はすっかり忘れてしまっていたというのに、ちゃんと覚えていてくれたことがすごく嬉しかった。

息子はどうでもいいようなお土産に、主人は少し不満そうなふりをした。が、自分の両親が相手を好いてくれるのはお互いに嬉しいことなので、「フリ」だけだ。

父は主人の母を見て、ちょっと反応したが、あとはいつもと変わらなかった。ぼんやりと天井を見つめるだけだった。時々、身振りで喋れないから、とか、点滴をずっとしてる、とか話してはいたが。

「K子ママ（主人の母）、俺が入院してる時、来てくれたよな？」

もしかして、それもあまり記憶が定かじゃないの？

「入院してすぐの時のことはあんまり覚えてないんだよ。覚えててもぼんやりとしか。」  
それでも、母が毎日来ないと、寂しがるというのは、うーん。

主人の母はすごく心を痛めたようだった。そして、母の事も心配してくれて、  
「お母さん、本当に、すごく、大変よね。」

何度もそう言う。未だにそう言う。

「あの時は、お父さん、亡くなっちゃうんじゃないかと本当に思ったわあ。」

辛そうに言う。きっと、あの状態を見た全員がそう思ったと思う。

父の兄妹もお見舞いに来てくださったそうだが、やはり皆、心を痛めて帰られたそうだ。

ここで、

5.CHOP療法で使用する個々の薬の特徴とはなんぞや

(1) G=シクロホスファミド水和物 (商品名 エンドキサン)

エンドキサンは、抗腫瘍薬の一種、アルキル化剤です。

エンドキサンの説明をする前に、

ワトソン・クリックのDNAモデルとよばれる模型を、テレビ、本、教科書などでご覧になったことはおありでしょうか？

DNA分子はヌクレオチドと呼ばれる物質が、鎖状になって2本ずつ並び、全体として二重らせん構造のねじれたはしごのような形をしています。

DNAのヌクレオチドは、糖（デオキシリボース）と塩基（アデニン [A] ・グアニン [G] 、シトシン [C] ・チミン [T] )とリン酸から成っています。

2本の鎖を結びつけているはしごの段々の部分（横の部分）は、A、G、C、Tがそれぞれ決まった相手（AとT、GとC）と水素結合によって結合しています。この水素結合というのは、弱いのです。固く強く結びついていると、複製して増えるとき困っちゃうからです。

複製を開始すると、まずこの2本の鎖が弱い結合（水素結合）のところで切れて、1本ずつに分かれます。

いいですか～？2本が1本ずつに分かれないと、複製できないんですよ～。複製できないって事は、増えることもできないんですよ～。ここんところ重要です。

アルキル化剤は、二重らせん構造を形成してる2本鎖のグアニンとグアニンを固く固く結びつけてしまいます。

固く結びつけられると、分かれることができなくなります。そうすると、複製できなくなります。複製できなくなるということは、増殖できなくなってしまうということです。

普通、細胞はアポトーシス（細胞の自殺プログラム）によって、癌化したり、異常が起こったり

すると自ら死んでいきます。

癌は、このアポトーシス機能がDNA異常により働かなくなってしまうたり、アポトーシスより分裂増殖が早く、異常な細胞が増大してしまったりして起こります。

その分裂増殖を抑える効果のある抗腫瘍剤が、このエンドキサンなどのアルキル化剤と言えます。

しかしですね、このアルちゃんは、癌ちゃん達だけを選んで仲人してくれるわけではありません。

正常な細胞も、まあまあ遠慮しないでいいから、と、くっつけちゃうお節介仲人さんなんですよ。

それが副作用としてでてきます。

重大な副作用に、骨髄抑制、出血性膀胱炎、排尿障害、心筋障害、心不全等々があります。

父は、骨髄抑制と排尿障害が出ました。

病とだけでなく、副作用との戦いでもありました。

## 富士山

---

主人の所に来たとき、私は前の人と離婚したばかりだった。  
あまりにも心が疲れてしまっていて、いつもぼーっとしていた。  
父ではないが、あの時のことはあまりよく覚えていない。  
そんな私を、主人は車で、色々な所へ連れて行ってくれた。  
箱根、山中湖、奥多摩、横浜、お台場、羽田、そして、富士山。  
目的地も決めず、ただ走ったりもした。

父がいつ亡くなってもおかしくないようなとき、  
このときも、主人は夜中に富士山の五合目に連れて行ってくれた。  
空の星は雲でよく見えなかったが、麓の灯が星のように瞬いていた。  
その綺麗さが、悲しかった。

霊峰富士。

私は心の中で祈った。

「お父さんの病気が、治りますように」

涙が出そうになった。でも、泣くと、主人が悲しがる。黙って耐えた。

風が冷たく感じた夜だった。

ちなみに、表紙の写真は富士五合目からではなく、十国峠からの夜景です。

ここで、

(1) エンドキサンに付け加えとして、

エンドキサンは、G同士を結びつける（架橋形成）だけでなく、本当はGとは結びつかないTとも結びつけてしまう（異常塩基対形成）ので、DNAの複製ができなくなるということです。

アルキル基をぶら下げたまま分裂・増殖しようとする、DNAが切れてしまうため、細胞は死んでしまいます。

そこが『抗腫瘍剤』と言われる所以です。

(2) H=ドキシソルビシン塩酸塩（商品名 アドリアシン）

アドリアシンは、抗腫瘍性抗生物質製剤です。

『アドリアシンは腫瘍細胞のDNAの塩基対間に挿入し、DNAポリメラーゼ、RNAポリメラーゼ、およびトポイソメラーゼII反応を阻害し、DNA、RNAの双方の生合成を抑制することによって抗腫瘍効果を示します。細胞周期別では特にS期の細胞が高い感受性を示します。』（『服薬指導のためのくすりの効き方と作用』國淳一（敬称略）著）

・・・なんのこっちゃ。。。

抗腫瘍性抗生物質のアドちゃんは人なつっこいです。輪の中に入るのが得意です。

DNAの二重らせんのはしごの段々の間に容易に入っていきます。そうやって混じっても追い出されません。

特にDNAを複製している時期（S期）にはすんなり仲間になれます。

しかし、アドちゃんがいることによって、お仕事のできない人たち（酵素）がいます。

DNAポリメラーゼさんとRNAポリメラーゼさんとトポイソメラーゼIIさんです。

DNAポリメラーゼさんのお仕事は、とっても簡単に言うとDNAを複製することです。

RNAポリメラーゼさんのお仕事は、とっても簡単に言うとDNAからRNAを作ることです。

トポイソメラーゼIIさんのお仕事は、DNAを切ったり、繋げたりして、もつれを直したり、再構築することです。

DNAの複製のとき、それぞれの染色体に2個ずつ複製が入ってます。これを1個ずつに分けないといけないのですが、2本がぐりぐり巻き付いたりしてます。

糸がもつれたとき、片方ないし両方を切って、もつれを直し、切ったやつを繋ぎ直すのが最も手っ取り早い方法です。この暴挙を、器用で力持ちのトポさんはDNAでやってるわけです。

トポIIさんは、2本切ることができるので、2本いっぺんに切っちゃったりします。

糸は切っちゃうと結び目ができてひじょーに裁縫などはやりにくくなりますが、DNAは塩基の相手がたった一人に決まっているため、綺麗に元通りに繋ぎ直せます。

普通はね。何もなければ。

ここで、アドちゃんが仲間になっていることによって、DNAを構成している子供達が

「やーだ！もっとアドちゃんと遊ぶー！！！」

となってしまう、思うように動いてくれなくなるわけです。

DNAを切った後に、アドちゃんが入り込んだら、どうなるでしょう？

トポIIさんは異質なアドちゃんが間にいることによって、お仕事ができなくなってしまいます。

ということは、DNAは切れたまんまになってしまうんですね。

そして、D、R双方のポリさん達もお仕事ができなくなるわけです。

その結果、DNA、RNAの合成ができなくなり、細胞は死滅するわけです。

重大な副作用に、心筋症、心不全があります。

追加されたばかりの重大な副作用に間質性肺炎がありますが、この副作用はわりと多いです。

2011年にこの副作用が追加された薬は数あるようです。

富士山といえば、木花咲耶姫を思い出す。

浅間神社の総本山である富士山本宮浅間大社に祀られている、綺麗な綺麗な女神様です。

『古事記』『日本書紀』に出てくる、らしい。

『らしい』というのは、どんな話として出てくるかは知ってるが、何という書物に載っているのか知らなかったり。

富士山の噴火を鎮めるため、水の神であるこの女神様が祀られているそうです。

桜が御神木だそうです。

女神様が祀られてるのに、富士山が女人禁制だったってちょっと変な話。

父が入院して、腫瘍をとってから、二ヶ月経った頃だったろうか。ずっと器具を入れていた喉を縫合することになった。

器具もとれて、話せるようになった父は、今までうつろだったのが嘘のように元気になった。病気になる前の父そのものに戻ったのだ。

かなり痩せてしまい、髪もないのだが、それを除けば、今までのあれは何だったの？というくらい元気になっていた。

冗談を言い、笑い、すたすた歩いた。

喋れないということは、父にとって、かなり苦痛だということだろう。

休憩室の椅子に座って、笑っている父を見ているのが夢のようだった。

本当にあれはなんだったんだろう？

瞬きもせず、天井ばかりぼんやり見る姿。

つい最近までそうだったのに。

それがここまで回復するものなのか。

「富士山ってすごい。」

心の中で思った。

泣きながら祈った事を、ちゃんと富士山が聞いていてくれたような気がした。

勿論、ドクターや看護師さん達、化学療法のおかげなのはよくわかっている。

父の快復力というのか、生命力というのだろうか、は、かなり強いのかもかもしれない。

迎えに来た祖母に、置いて行かれてしまったのだから、なかなかお迎えはこないのかもかもしれない。

父はそれでも、夜になってベッドに寝ていると、このまま死んでしまうんじゃないかと、不安になると言う。

もう治らないんじゃないか、退院して家に帰っても、同じ部屋にいた人達のように、またすぐに戻って来て、そのまま死んでしまうんじゃないか。そんな風に考えてしまうという。

母もドクターに、

「胃癌みたいに、そこを切り取れば大丈夫というのじゃないから、いつまた出てきてもおかしくないですよ。」

と言われたと言う。

「なっちゃったものは、しょうがないよね。」

と母。

病気になってしまったのは、誰のせいでもない。

『そうだよ、お父さんのせいじゃないんだよ。』

ここで、

(3) O=ビンクリスチン硫酸塩製剤（商品名 オンコビン）とは

オンコビンは抗悪性腫瘍剤です。

『抗悪性腫瘍剤』の『抗』は『こう』の他に『あらがう』という読み方があります。

『あらがう』というのは、『抵抗する』とか『逆らう』という意味であります。

『抗悪性腫瘍剤』とは悪性腫瘍に抵抗するための薬です。

他に、『抗生物質』という薬があります。

これは、生物にあらがう薬ということですが、生物は生物でも、微生物ですね。

『本剤の作用機序の詳細はまだ明らかにされていないが、紡錘体を形成している微小管のチューブリンに結合することにより、細胞周期を分裂中期で停止させると考えられている。』（日本化薬株式会社 オンコビン注射用1mg能書より）

．．．．．チューブリンって初めて聞いた。。

私が『生物』を学校で習っているときには、聞かなかった言葉だ。。

それはいつ頃のことかは深く追求しないでください。

調べてみたところ、チューブリンじゃなくて、チューブリンのようです。

チューブリンとは、細胞内の微小管を構成するタンパク質です。日本人が命名したそうです。命名したって事は、みつけたってことか？みつけれられてはいたけど、名前がなかったってことか？

微小管というのは、細胞の中に存在します。

外径25nm、厚さ5nmの細管、形的にはホースを想像していただければよいのではないのでしょうか。

そのホースが、重要な役割を多々担っているわけです。

特に、細胞が分裂するときに、とっても重要な地位を示すわけです。

動物細胞が分裂するとき、まず中心体なるものが分裂します。

2つに分裂した(本当は4つに分裂)中心体は、細胞を地球に例えると、えっちらおっちらと南極と北極の位置に移動します。向かい合った位置に移動するわけです。

到着すると、周りに放射状に糸が現れて、星状体を作ります。

そして、染色体がお行儀よく赤道面に並ぶと、星状体からにゅーっと多数の手(紡錘糸)が出てきて

、

「初めまして。結婚してください。」

と言うわけです。そして、有無も言わず自分の所へ連れてくるわけです。



ともかく、星状体からの紡錘糸がそれぞれ染色体とくっつくと紡錘体が形成されます。このときが細胞分裂中期なわけです。

ここで出てきた『手（紡錘糸）』は、チューブリンでできてます。

この伸ばそうとしている手に、オンちゃん達が「わーい♪遊んで遊んで～♪」とくっつくと、なぜか星状体は手が伸ばせなくなっちゃうわけです。そうするとせっかく整列した染色体を迎えにいけなくなるわけです。

「助かったわ、好きでもない人の所に無理矢理連れて行かれなくて。」

と染色体が思っているかどうかはともかく、ということはどういうことかということ、ここで細胞分裂がストップするわけです。

この先、普通だったら、染色体が二つに分裂して、紡錘糸に手を引かれて両極にお嫁に行き、娘細胞ができて、めでたしめでたし。

と、なるはずです。普通だったらね。

オンコビンの重大な副作用に、末梢神経障害があります。

しびれ感、知覚異常・消失、歩行困難、痙攣、言語障害、神経痛、疼痛、下肢深部反射の減弱・消失などが現れることがあります。

父はかなり長い間、これに苦しみました。手足がしびれて薬をシートから出せない、ちゃんと歩けない。

その時期が長かったです。

錯乱、昏睡などの副作用もあります。そのことについても、後々書きます。

あと、骨髄抑制、腸管麻痺(便秘がひどくなったりします) などなど多数の副作用があります。腫瘍だけではなく、正常な細胞にまで効力を発揮するため、このような副作用が出てきます。

副作用はどんな薬にもあります。

薬とは、極端に言えば、毒を薄めて作るのです。

その病気、個人にあう量を、上手く服用してこそ薬なのです。

## 友達の話と私の叔母のこと

---

昨日、『血液のガン 悪性リンパ腫と白血病(飛内賢正(敬称略)著)』を読んでいた。  
読んでいくうちに、父の腫瘍は癌研に行ってすぐとったとばかり思っていたが、どうやら違うらしいと気が付いた。

そこで、母に確かめると、母も最初は

「とったんだと思うよ。」

と言っていたが、

「喉に穴を開けたのは呼吸確保のためで、腫瘍は薬で治したんじゃないの？」

と訊くと、母はちょっと考えてから、

「そうさそうさ、1週間くらい経って、回診のとき、先生がお父さんの喉を覗いて、『うんうん、小さくなってきたね。これなら大丈夫だ。』って言ってたよ。」

と言った。

父の腫瘍は手術でとったのではなく、薬で治したということが判明いたしました。

「そう言えば、薬で小さくならなかったら手術でとるって言ってたよ。・・・なんで？今頃、そんな話？」

はい、あの時の事を書かせていただいています。

そして、今頃、勉強させていただいています。

当時はそんな余裕はなかった。なるべく、父の病気の事は考えないようにしていた、と思う。  
考えると、悲しくなるからだ。

父が入院しているとき、退院してから、友達や主人の職場の方などに話を聞いた。

身内、特にお父さんが癌で亡くなったという話が多かった。

主人の職場のアルバイト女の子のお父さんは、彼女が中学生の頃、肺癌で亡くなったそうだ。  
いつも強い、頼りになるお父さんだったという。

お見舞いに行くと、必ず

「もうすぐ良くなるからな。」

と仰有ったそうだ。

どんなに痩せて、顔色が悪くなくても、とても辛そうでも、いつもそう仰有ったという。

そしてそのまま帰って来なかったそうだ。

「お父さんが帰ってこないなんて、今も信じられない。」

と、大学生になった彼女が言った。

「帰ってくるとお父さんが言ったから、絶対帰ってくる。」

と信じて疑わなかったそうだ。

「でも、帰ってこなかったから・・・」  
心が不安定になったと、彼女は言った。

友達の結婚式で一緒になった友達と、ホテルの部屋で話を聞いた。

「父がつい最近癌で死んで。」  
と彼女が言う。あれ？でも、去年の夏はお父さんの話が出てたよね？今は10月で  
「うん。見つかったときはもう手遅れで。」  
彼女のお父さんは、スキルス性胃癌だったという。

スキルス性胃癌というのは、あまり胃の粘膜に変化を起こさないまま、粘膜層の下に病巣が広がっていき、最終的に、胃が正常の半分ぐらいにまで収縮してしまう、悪性度の高い癌です。胃が正常な大きさのうちに見つけるのはとても難しく、胃壁全体が堅くなって初めて見つかります。

友達のお父さんも、検査のときは異常なしだったのが、何ヶ月か後に、症状が出たときにはもう手遅れだったそうです。

進行胃癌のボールマン分類の4型に分類されます。

「あっという間だったから、まだ吹っ切れないよ。」  
と、友達が言った。

職場の先生と幼なじみの友達のお母さんは、脳腫瘍で亡くなっている。  
お二方とも、何年も寝たきりになって、眠るように亡くなったそうだ。

「最期は苦しまないで逝けたからよかったけどね。」  
二人が言う。

「頭にこぶみたいのが出てくるんだよ。その度に手術して。痛い痛いって言うんだよ。でも、もう意識がなくなって。」

「頭が倍くらい大きくなってんだよ。もうどうすることもできないんだって。もうだめだろうって。」

とっくの昔に覚悟はしていたよというように、穏やかな口調で言う二人。  
もう、十分苦しんだから、と。

父と入れ違いくらいに、叔母が乳癌の再発で入院していたそうだ。

「そうだ」というのは、私は、叔母が亡くなる寸前にそれを聞いたからだ。

今から17～8年くらい前になるだろうか、叔母から胸に小さなしこりがあると聞かされた。

「すごく小さいのだから、とっちゃえば大丈夫なんだって。」

明るく言う。

そのときは、乳癌は手術が治療の第一歩だなんて知らなかった。

早期発見だったし、手術すれば大丈夫だと思っていた。

叔母もそうだったと思う。

キャンディーズのスーちゃんが乳癌で亡くなって、大きく取り上げられて、初めて切除すれば終わりじゃ無いということを知った。

叔母も、ずっと何か治療を続けていたのだろうか。

5年以上経って再発し、気が付いたときは、全身に癌が転移していたそうだ。

叔父は、兄姉にも黙っていたそうだ。

入院しているとき、全身をチューブで繋がれ、「痛い痛い」と叔母が言うのだそうだ。

愛する妻の、そういう姿を叔父は誰にも見せたくなかったのかもしれない。

桜の咲く頃、叔母は亡くなった。

その日、主人と私は京都にいた。

夜、ホテルで横になっていると、なんだか変な感じがする。

私は靈感などは全くなく、何も感じないので、どこへ行っても爆睡なのだが、このときに限ってなかなか寝付けない。

横を見ると、主人はもう寝ていた。

部屋は、ぼんやり明るかった。

『疲れすぎて眠れない』ということが、科学的に証明されているらしい。

ので、きっとそれだよと、目を閉じた。そして、十数秒閉じていただろうか、やっぱり眠れないやと、次に目を開けたとき、部屋は真っ暗だった。

・・・今まで、電気ついてたよね・・・？

照明のスイッチは、主人の方にあった。が、主人は動いた気配がなかった。

同じベッドだから、動けばすぐわかる。

おまけに、何も感じないはずなのに、何かいるような気配がする。

いや、気のせい！疲れてるから、そんな気がするだけ！

でも、電気。。

いや！主人の手がきつと当たって消えたんだ！そうに決まってる！

主人にぴったりくっついて、すぐに眠りについた。

朝、照明のスイッチを見ると、『OFF』になっていた。

そして、スイッチの『ON』『OFF』は回すタイプで、手が当たったくらいじゃ消えないということが判明した。

「夜中、消してないよね？」

主人にたずねる。

「いや、消してないよ。」

更に、スイッチは床に近いところにあり、ベッドの一番端でうつぶせになって手を伸ばさないと届かないところにあった。

寝ぼけて、リモコンで電気やエアコンをつける主人が、この電気のスイッチを操作する可能性はないとは言い切れないが、昨夜のあの時はちょっとも動いていない。

それに、あの気配。

何だったんだろう？

その日も同じ部屋に泊まったが、その夜は何も無かった。

次の日、帰りの車で母にメールをした。

母のメールには、

『今日、M子叔母ちゃんのお通夜だったんだよ。明日はお葬式に行ってきます。』  
慌てて母に電話をすると、あの、照明の消えた日に亡くなったという。

あの気配、叔母ちゃんだったのか。

何も感じない私に、気が付かせるのは難儀だったろう。

遺された叔父は、今も

「寂しい」

と、兄姉に電話をかけてくるという。

## スカイライン

---

スカイラインと言えば、メリケンでしょう。父と同年代の方々には憧れの車だと思う。父にとっても同じで、33、35と乗っている。

35に換えてすぐに、悪性リンパ腫を発症し、ほとんど乗ることができなかったそう。出不精で、駅もお店も歩いて5分の所に住んでいて、どちらかといえば必要の無いものなので、ほとんど乗らなかったと言いかえてもいい。

だが、それでもさぞ気にかけているだろうと、お見舞いに、スカイラインのミニカーを買って行った。ちゃんとドアも開くやつだ。

父の車は4ドアだったが、無く、型番も同じものがなかったので、2ドアで、Rの、形的にはずっとカッコいいやつを買ったのだった。

だいぶ回復した父は、個室から再び6人部屋に戻っていた。

ベッドは満員だった。全ての方が悪性リンパ腫だった。

その中に、若いお兄さんがいた。まだ学生さんだったと思う。

お兄さんは、ミニカーをとて気に入り、ドアを開けたり閉めたりして、嬉しそうに見ていたという。

お兄さんは、父より先に退院していった。

定期的に治療に通って来る時に、一緒に過ごした病室に顔を見せに来たそう。

その部屋にまだ入院していた方々は、こんな所へ来ちゃだめだと言ったそう。また戻って来ることになったらどうする、と。

彼は笑っていたという。

ちょうど真夏だったので、

「ここでは感じなかったけど、外は暑くて、辛いですよ」

と言っていったそう。

入院している間、主人は父の車をたまには動かして欲しいと頼まれていた。

主人は父のお見舞いに来る度に、元々父の車だった33と現在の父の車の35を入れ替えて、交互に乗っていた。

癌研が池袋にあった時、父の病室は駐車場に面していた。

私達が帰る時、父が窓の所に立って、こちらを見ているのに気が付いた。車の窓を開けて、3人で手を振る。主人は父に見せるように、ゆっくり35スカイラインを走らせた。父は自分の車が走っていくところを、若いお兄さんに見せていた。あれだよ、と指さすと、お兄さんが笑って頷い

ているのが見えた。

車は本当に父の宝物だと思う。あれにまた乗るんだといつも言っていたそうだ。

それが、もうその宝物にも乗れなくなるかもしれないというような状態に再びなってしまおうとは、このときは思いもしなかった。

このまま元気になって退院できるだろうと信じていたのだ。

ここで、

#### (4) P=プレドニゾン

CHOP療法の上の3つを使うのは理解できましたが、最後に出てきたのは、合成副腎皮質ステロイドホルモン剤、商品名プレドニン（塩野義製薬）とかプレドニゾン（武田薬品工業株式会社など）。

なんでプレドニンを使うのか、正直よくわかりませんでした。

強力な抗炎症作用。免疫抑制作用。

この辺の目的で使用されるのでしょうか。

世間一般で、皆が恐れる悪名高きステロイド剤。

副作用の怖さが先にばんばん宣伝されて、プレちゃんがどんなにいい薬なのかが一向に宣伝されないのが不憫でなりません。

内科・小児科領域から外科、婦人科、整形外科、泌尿器、眼科、耳鼻咽喉科あらゆる領域で使用されるのに、『ステロイド』と聞いただけで、皆様警戒警報を鳴らす次第です。

その薬に関する知識が乏しい方が、何の考えも無く乱用してしまうから怖いのであって、専門家がちゃんと診断して処方する分には、とってもいい子なのに。プレちゃん。

ちょっとの量と期間で、抜群の効き目。ということは、使い方が難しいということでもあります。

専門家が処方しても、個人の体質によって副作用が出てしまう場合もありますが、それはどんな薬にもあることなんですよ。

副腎皮質ホルモン（ステロイド）は、『ホルモン』と名がついてるのを見てもわかるように、体の中でつくられます。コレステロールを原料に合成されます。ので、薬のプレちゃんは『合成』副腎皮質ホルモンと呼ばれます。

腎臓の上によっこいしょのつてる器官ー副腎ーの外側（中側は『髄質』と呼ばれます）から分泌されます。

体の中の受容体、よく鍵穴に例えられますが、に、副腎皮質ホルモンのような鍵の役割をする物

質がくっつくと、何らかの反応が起こります。

副腎皮質ホルモンの受容体はほぼ全身にあります。ので、色々な領域で使うことができる薬なのです。

ただ、疾患のある場所の受容体だけにくっつくのではなく、関係ないところにもくっついてしまうため、副作用が起こってくるのです。ということは、余計な副作用が起こりやすくなるということでもあります。

長い間、合成副腎皮質ホルモン剤を服用して（使用して）いるとどうなるでしょうか。

簡単にいうと、副腎が怠けてホルモンを作らなくなってしまうのです。

よくステロイドを止めるときは、徐々に量を減らす、というのをお聞きになったことがあると思います。これは、急に止めてしまうと、体の中でステロイド不足が起こるからです。

話を元に戻して、なぜ悪性リンパ腫の治療薬の1つが、プレドニンなのか。

調べたところ、その機能によって、特異的な遺伝子の転写を調節することができるらしい。

きました！『遺伝子の転写』！！

前に、癌は『アポトーシス（あらかじめプログラムされた細胞死）が行われなくなった細胞の増殖』というお話を簡単に書きました。

この『アポトーシス』を誘導させるために、ステロイドを使用するそうです。

知らなかった。プレちゃんにそんな作用があったなんて。

今回でCHOP療法全ての治療薬が簡単ながら説明できました。

もう一つ、重要な薬があります。

父がぎりぎり使用できるようになった☆スター☆ーリツキシマブ（商品名 リツキサン）ーという薬について、次の機会に書きたいと思います。



## リツキサン

---

治療のとき、よく母の口から聞いた名前だ。

その頃は、いや、今でも、新しい薬だった。言うなれば、新薬だった。

2001年から使われ始めたそうなので、父は最新治療にぎりぎり間に合ったのだった。

突然主人に、

「リツキサンってさ。」

と言いかけると、主人は、

「？」

という顔をした後、拳を握りつつ、眉間に皺を寄せ、口を少し歪め、ちょっと傾いて私を見る。

「・・・それは五木さん。。」

森さんと混じってるような気もするが。

「あれ？違った？」

の顔をした後、右腕をボーリングの要領で振ってみせる。

「それは律子さん！」

10年経って、やっとそんな冗談で笑えるようになった。

が、当時はそれどころではなかった。

リツキサンの投与を始めたとき、まだ父は空ろに天井を見ているだけの状態だった。

今は、R-CHOP療法が、B細胞型悪性リンパ腫の治療の主流になっているという。

### (5) R=リツキサンとは

リツキサンというのは商品名で、有効成分名は『リツキシマブ』です。

『抗悪性腫瘍剤 抗CD20モノクローナル抗体』と能書にはあります。

リツキサンは、B細胞型悪性リンパ腫にしか作用しません。

その他の細胞には見向きもしません。完全にアウトオブ眼中です。

リツキサンことりっちゃんは、B細胞さんだけが持ってるCD20抗原が大好きです。

CD20抗原は、正常及び大半のBリンパ腫細胞にあるリントパク質の抗原です。

『抗原』に『抗体』といったら、抗原抗体反応を利用した薬だということが、なんとなく想像できるのではないのでしょうか。

体内に投与されたりっちゃんはめざとく、B細胞さんのCD20抗原をみつけると、

「いや~ん、ステキ！」

とばかりにそれ（CD20抗原）にくっつくわけです。

くっつくだけではなく、

「私の彼氏見て！」

と、免疫細胞のNK細胞さんやマクロファージさんなどを連れてきます。

B細胞さんを見た免疫細胞さん達、

「やあだあ これのどこがいいのよ？」

「この人、絶対変！正常じゃないわよ！」

と、攻撃を始めます。

そして、体の細胞を攻撃するヒト補体系なども活発化し、

しまいには、

「あなた、死んだ方がいいわよ。」

という恐ろしい勧告をするようになり（アポトーシス誘導）、

Bリンパ腫細胞は攻撃を受け、屈辱を受け、あえなく撃沈、となるわけです。

リツキサンは、当時、今もそうかもしれませんが、とても高価でした。

リツキサンだけじゃなく、抗癌剤はどれもとても高価です。

一昨年、従妹が乳癌を発症し、手術しました。

来月、叔母が脳腫瘍の手術をします。

今、叔母は、一人じゃ満足に歩けない状態だそうです。

ただ、悪性じゃないので、手術が成功すれば、また一人で歩けるようになるだろうということです。

機会があれば、今度は、乳癌や脳腫瘍について調べて書いてみたいと思います。